



生活様式が大きく変わったJAや組合員の皆さまに贈る日本農業新聞の
読みどころ集です。「この1週間を振り返る」ため週刊でお届けします。



日本農業新聞の読みどころ

適正生産量より深掘りを

22年産米 JAグループが方針

JA全中は13日、2022年産米へのJAグループの取り組み方針を決めた。主食用米の需給改善には「21年産をベースに、さらなる作付け転換が必要」と指摘。国の示した適正生産量からの深掘りを目指し取り組む必要があるとの考えを示した。非主食用米への転換の他、麦や大豆、子実用トウモロコシなどの拡大も視野に入れる。

家徹会長は、21年産の
大規模な取り組みでも
同日の記者会見で、
需給環境は十分には改

22年産で国が示した
適正生産量は675万
1%減にとどまった。
方針では、21年産の
は、5%近くを削減し
た「21年産をベース」

JA全中は2022年産米の
適正生産量675万トより、
さらに作付け転換を深掘り
する方針を決めました。近年
は年10万トほどの需要
減退に加え、在庫数量や
販売見込みを勘案。自給
率の低い麦や大豆、支援
対象になった子実用トウ
モロコシの作付けを広げ
ます。輸出用米も需要に
応じて、銘柄別に振興し
ていきます。(1/14付1面)

今週の記念日
★1月17日
「おむすびの日」

ごはんを食べよう国民運動推進協議会(事務局:兵庫県)が2000年に制定し、米穀安定供給確保支援機構が2018年に活動を引き継いだ記念日。ごはんのおむすびだけでなく、人と人との心を結ぶ「おむすび」の日をつくろうと公募し、1995年に発生した阪神淡路大震災で、ボランティアによるおむすびを忘れないために、大震災の起きた1月17日をその日付としました。

<日本記念日協会から>



優勝した宮城県農業高の女子生徒
(東京都文京区で)

宮城県農高のチームに栄冠

全国の高校生らが新規事業のアイデアを競うコンテスト「ビジネスプラン・グランプリ」(日本政策金融公庫主催)の最終審査会が東京都で開かれ、プラスチックの残骸を出さない水田肥料の販売事業を提案した、宮城県農業高校の女子生徒3人のチームが優勝しました。水田用の肥料はプラスチックでコーティングされ、海や河川の汚染の原因になるケースがありますが、優勝チームは残骸が出ないように野菜用肥料を改良しました。(1/11付2面)

全国の高校生らが新規事業のアイデアを競うコンテスト「ビジネスプラン・グランプリ」(日本政策金融公庫主催)の最終審査会が9日、東京都内で開かれた。書類選考を通じた10校が企画を披露。プラスチックの残骸を出さない水田肥料

新規事業コンテスト 3087件アイデア競う

の販売事業を提案した、海や河川の汚染の原因になるケースがある。優勝した。水田用の肥料は水に溶け出す時期を調節するためにプラスチックし、安価で農家に販売のコーティングが施される事業を提案した。優勝チームは、ゆとりと溶ける野菜用の肥料を水田用に改良

プラごみ出さない水

22年農畜産物トレンド

日本農業新聞がまとめた農畜産物トレンド調査で2022年の販売キーワードを流通業者に聞いたところ、「持

続可能性」が1位となった。環境に優しい取り組みが新たな商流をつくる。「地産地消・国産志向」も急上昇。商品価値を高められると、地域性のある国内産品への期待が集まる。

▶3面に「調査結果」、9面に企画「トレンド・野菜編」

「持続可能」へ移る商流

国産拡大こだわり

【解説】国産農畜産物が消費ニーズとして流通業に注目を集める。景気も冷え込み最

22年のキーワードは「持続可能性」が1位となった。持続可能な開発目標(SDGs)や倫理的な消費行動(エシカル消費)などが浸透。若者にも訴求できるテーマと見えています。2位は「安全・安心」、3位は「ネット取引・宅配」で、コロナ禍で勢いがあります。「地産地消・国産志向」も急伸。(1/11付1面)

本紙が流通業者を対象にした農畜産物トレンド調査で、2022年のキーワードは「持続可能性」が1位でした。持続可能な開発目標(SDGs)や倫理的な消費行動(エシカル消費)などが浸透。若者にも訴求できるテーマと見えています。2位は「安全・安心」、3位は「ネット取引・宅配」で、コロナ禍で勢いがあります。「地産地消・国産志向」も急伸。(1/11付1面)

若者に訴求期待「地産地消」も

2022年の販売キーワードトップ10

順位	キーワード/回答率(%)	流通業者の主な意見
1	持続可能性 <新> 49%	「SDGsが浸透し、社会課題を解決する商品が選ばれていく」(乳業メーカー)、「若い人に訴求するキーワードに」(花き卸)
2	安全・安心 <3> 47%	「食の基本であり、最低条件」(eコマース)、「コロナ下で健康意識が高まり、より安全・安心が求められる」(外食メーカー)
3	ネット取引・宅配 <2> 38%	「コロナ下で利便性が評価され、需要がさらに増加」(果実卸)、「ネット通販で各地のこだわり食材を買うニーズが高まる」(青果卸)
4	安定(価格・数量) <3> 37%	「輸入品の調達が不安定」(食肉卸)、「収入が伸び悩み、価格の見方が厳しい」(生協)
5	健康(機能性) <6> 31%	「体調管理需要が拡大。農産物の付加価値化で機能性が鍵に」(卸売会社)
6	地産地消・国産志向 <11> 30%	「輸入停滞で国産に目が向く」(米卸)、「SDGsと共に地産地消が活発化」(小売り)
7	新型コロナウイルス対応 <1> 28%	「オミクロン株の流行によって、コロナ下のマーケットがしばらく続く」(花き卸)
8	物流 <8>	「新鮮な食品を届けるためには、物流網の確保が不可欠となる」(食品卸)
9	簡便・時短 <10> 26%	「家で過ごす時間が増え、調理負担を軽減できるニーズが高まる」(乳業メーカー)
9	価値感(節約志向) <6> 26%	「不景気や収入の減少傾向から、消費者は支出を抑える傾向にある」(食肉卸)

※キーワードの<>内の数字は昨年の順位 <新>は新設

果樹農家の焼き芋人気



山形県東根市 厳冬期だけ販売

山形県東根市内の果樹農家5人が、1月末までの土・日曜日、「つぼ焼き芋」を販売している。厳しい寒さの中、つぼの中で炭火でじっくり焼き上げた甘く、ほくほくの焼き芋が静かな人気を呼んでいる。

つぼの中でじんわり

つぼの中のサツマイモの焼き加減を確かめるメンバー(山形県東根市で)

「つぼ焼き芋」の販売は、サクランボやリンゴなどの果樹園が広がる同市板垣中通りで、一昨年11月から始めた。店の名は「六角屋」。地元の神社で氏子を務めるメンバーの一人が、境内で「つぼ

山形県東根市の果樹農家5人が、1月末までの土・日曜日、「つぼ焼き芋」を販売しています。厳しい寒さの中、つぼの中の炭火でじっくり焼き上げた甘く、ほくほくの焼き芋が静かな人気を呼んでいます。店の名は「六角屋」。地元の神社で氏子を務めるメンバーの一人が、境内で「つぼ焼き芋」を振る舞ったところ評判になったのがきっかけでした。使う芋はメンバーが栽培した「べにはるか」などです。(1/12付11面)

日本農業新聞 東北支所(青森・山形県普及担当) 中村 敦信

2月から担当県が変わるためJAを巡回し、ご挨拶させていただきました。岩手と宮城県を担当します。改めてよろしくお願ひします。挨拶のたび「どちらの出身ですか?」と聞かれ、「九州の福岡県です」と返事をしました。3年前、初めて東北に着任した時も同様のやり取りをして、徐々に人間関係を築いてきたことを思い出しました。2月から東北4年目となりますが、初心を思い出し頑張りたいと思います。

